

マルクスのリカード批判(序説)

著者	平林 千牧
出版者	法政大学経済学部学会
雑誌名	経済志林
巻	50
号	3・4
ページ	157-185
発行年	1983-03-15
URL	http://hdl.handle.net/10114/7647

マルクスのリカード批判（序説）

平 林 千 牧

目 次

- 一 はじめに
- 二 リカード批判の要点
- 三 リカード「剰余価値」論の批判
- 四 小 括

一 はじめに

いわゆる初期マルクスにおいて、国民経済学リ古典派経済学がすでに批判的・否定的対象として重要な役割を果たしていたのであったが、その際に、批判の最も積極的な対象とされた学説について、A・スミスのそれであったとしてよいことは、おそらく多言を要しないであろう。また、すでに明らかなように、マルクスの先行諸経済学に対する関係のうちで、A・スミスに対する関係は、濃淡の差はあるとしても、そのごほぼ一貫して持続的なものであったと言えよう。他方、スミスと並らぶ古典派経済学の重要学説をなすD・リカードに対する関係は、事実上はマルクスの「哲学上の清算」のあとに、すなわち、彼自身の研究上の対象が次第に経済学に絞られて来るようになった際に積極的な考察対象として登場するようになってきた。同じ古典派経済学の理論に対する関連として、マル

クスのこの両者にかかわる姿勢の差異については、そのこと自身できわめて興味ある示唆を受け取りうるわけであるが、経済学そのものの側からみれば、当然のことながら、後者に対するマルクスの関係が、彼自身の対象把握と密接に結びついていて、彼が近代社会を三階級社会として実質的に確定し、その社会の内的経済学的性格を明らかにするものとして、リカードと相対することとなったことを示すことであった。

ところで、初期の「リカードに関するノート」以降具体的にマルクスがリカードの理論と相対することになっているのは、周知のように、『哲学の貧困』（以下、『貧困』とのみ表記）においてであった。このブルードン批判の書において彼がリカードに着目したのは、実質的には近代社会が階級社会をなしており、ブルードン理論をその点において、リカードによって説明されたその社会の経済学的解剖の成果をもって批判するためであった。したがって、その際のマルクスにおけるリカード理論の考察は、多分にブルードン批判にかかわっていわば便宜の利用するという性格を帯びることになっていた。もちろん、経緯がそうであったとしても、彼のそうした利用自体、ミス越えるリカード理論への着目、吸収を伴うものであったと言えようし、事実すでに別のところで若干の考察を行なっておいたように、このリカードとのかかわりを通じて、この時期以降彼の対象把握のための独自の視角が明確化されていったのであった。

マルクスによって明確化された対象把握の方法——資本・賃労働関係を二つの側面にすなわち流通・交換のそれと生産・剰余価値の生産のそれとの二つの側面に分けて把握する方法——は、先行学説との彼の関係からみれば、おそらく右のようなリカードに対するいわば積極的な対応の成立を度外視するわけにはいかないであろう。というのは、事実上、このブルードン批判を媒介とするリカードへの着目を通じて、その直後に彼は、『賃労働と資本』の考察のうちに、先述のごとき方法的視角を示しうることになっているからである。もちろん、このような事情は、

ある意味では一種必然的なことでもあった。なぜなら、彼のいわゆる初期的諸研究は、近代社会ⁱⁱ資本主義社会を、三階級関係を支配的なものとするそれとして、十分視野にいれうるようになっていなかったのであり、彼の近代社会批判としての筋道からすれば、その根本的な在り方として、この社会の階級性の批判的解明へと進まざるをえなかったからである。

とはいえ、『貧困』におけるリカードの役割は、やはり本質的なところでは、ブルードン批判という視点からのものであつて、その域を越えうるものにはなっていなかったと言えよう。しかも、そこで行なわれたマルクスのリカード理解に基づく批判も、必ずしもブルードン理論の本体に対して十分なものとなつてはいなかった。その本体というものは、経済学の領域内において把握するならば、「リカード理論の平等主義的適用」ということよりもむしろA・スミスの労働価値論の近似的「適用」とされるべき性質を有していたと言えよう。⁽²⁾したがって、ここには、彼の経済学研究の筋道からすれば、重要な問題が生ずることになつていた。すなわち、一つには、いわゆる初期諸研究において否定的にとらえられていたA・スミスを核とする国民経済学に対して、今度は、リカード理論の評価に対応してスミスの学説の位置づけの再検討が必然化されざるをえなかったのであり、それゆえリカード評価自体がすでに新たなスミス評価を必要としていたということである。しかも、次に、このスミス評価は、この時点ではなおそれ以上にやっかいな点を含むものとなつていたのであつて、ブルードン批判は、その実すでに先述のような事情からしてスミス批判でなければならぬはずであり、それゆえ、逆に単なるブルードン批判そのものではスミスの学説史的評価の不在な視点をもつてするリカード理論への着目という性格をもち、そのため当然のことながら、学説史上のリカードの位置やその理論の正確な評価に困難が伴うこととならざるをえない関係になつたと思われる。そこで、リカードの評価自体では、新たなスミス評価が要請されながら、他面ではこのスミス評価その

ものが直ちに積極化されえないというもう一つの問題が同時に含まれていたのである。

もちろん、こうした構図にありながら、後者の点では、やや別のスミスへの経路がすでに成立していたというような側面をも見逃すことはできないであらう。この点もすでに別稿において若干の考察を行なっておいたように、マルクスのいわゆる初期疎外論は、労働疎外論としてみれば、私的個人による労働の疎外・外在化としての商品経済的表出を軸としているかぎりでは、大きくはやはりスミスの商業社会の枠組と重なる性格をもつものであった。もっとも、その際に、疎外論としていわば近代社会の顛倒的性格の暴露に力点が置かれていたのであって、スミスにおける労働価値論に基づく社会の法則的性格をも視野に入れるという関係にはなかった。むしろ、自明のことながら、そうした暴露とともに、古典派経済学の対象の認識方法の否定就中労働価値論の否定として結果することになっていたのである。

そうした事情を念頭に置くと、『貧困』におけるマルクスのブルードンへのかかわりでは、事柄はいっそう複雑となっていたように思われる。すなわち、この場合のマルクスによるリカード理論の評価ならびにその理解がまったく正当であったか否かはともかくとして、彼がひとまず「現代における科学的理論」としてリカード理論を受容したかぎりでは、それにおける根本的性格をつまみ古典派労働価値論を事実上は認知するというコンテクストにあった。そうであるとすれば、その古典派的なるものは、ほかならぬリカードのみの事柄であっただけではなく、ブルードン理論の一性格でもあり、なおかつ先述のごときマルクス自身をも巻き込むことになっていたものだったはずである。したがって、見方によれば、ブルードン批判は、マルクス自身に反転しうることであったし、事実上も、『貧困』において批判に決着がつけられたわけではなかった。あるいは、逆にみれば、マルクスは、そこにおいてはじめて古典派との経済学のかかわりとしては本質的な問題を自己に提起することになったとも言える。なぜな

ら、この批判のなかで彼ははじめて商品経済における内的自律的規制関係をすなわちその法則的自己規制の性格を認めなければならなかったからであり、その意味では、少なくともそうした側面を「労働貨幣」論として積極的な論点を提示したブルードンとようやく肩を並べたところであつたからである。

右のような点は、すでに『経済学批判要綱』(以下、『グルントリッセ』と略称)における貨幣論の詳細な検討が、再度ブルードン労働貨幣論の批判として行なわれていることからして自明なこととなつていよう。そして、その批判の反面、あるいはむしろその実質をみるならば、そこに真に介在することになつていたのはA・スミスであつたはずである。すでに言及したように、労働貨幣論を労働価値論の領域にひき移してみるならば、それはスミスの「商業社会」に帰着させざるをえないであらうからである。それゆえ、この点は再度マルクスの体系的考察のなかで問われることになつたわけであるが、その処理は彼の体系的方法においては資本・賃労働関係の第一の過程すなわちその交換の側面として理論化されることになつたのである。

右のような関係からすると、『貧困』で積極的に登場することになつたリカードは、マルクスにとっては、同時にスミスに対する関係をも含むことになつていたのであり、のちの彼の考察や前述の彼の方法的視角からすれば、固有にはスミスに結びつく論点を通じて具体化されているとしてよいように思われる。そうであれば、彼の「経済学批判」としての体系的考察において、リカードが本来の批判の対象として占めることになる位置は、主として方法的視角のうちの第二の側面すなわち「生産」のそれになるわけであり、これに対して、第一の側面はその生産の側面からいわば反射的にスミスに対する関係を通じつつ考察されることにならざるをえないのである。もちろん、こうしたことは、スミスとリカードとの経済学の体系的性格の差異自体から生じうることであつて、マルクスはそれを彼に独自の経過のうちに確認することになつたのであり、しかも、彼が『グルントリッセ』における作業を通

じて把握した資本・賃労働関係の内的性格は、あらためて彼のリカード批判の視点をそこに定めることを可能にしたはずである。そこで、以下では、彼によって位置づけられたリカード理論が、いかなる評価のものとしてであったかを明らかにしようとするのであるが、このことは、同時に彼の対象把握の理論と密接な関係にあるわけで、「経済学批判」体系の基本的性格を確定するために欠かせない作業の一部でありうると考えるものである。まず、小論では基本的な論点と思われるものに焦点を絞はり、リカードへのマルクスのかかわりの大枠の性格と問題とされるべき諸点をいわば予備的考察として明らかにしようとするものである。⁽⁴⁾⁽⁵⁾

(1) 拙稿『『経済学批判』体系の一考察』、『経済志林』、第四〇巻第三号、一九七二年、を参照されたい。

(2) この点に関しては、すでにきわめて興味ある有益な成果が示されている。佐藤茂行『ブルードン研究』（木鐸社、一九七五年）のとりわけ「後篇」「第一章 ブルードンとスミス」、「第四章 ブルードンとマルクス」での考察は的確かつ説得的であると思われる。

(3) 拙稿「マルクスにおける重商主義」、『経済志林』、第五〇巻第二号、一九八二年、所収、を参照されたい。

(4) なお、以下の考察は、すでに『『経済学批判』体系の一考察』として行なったマルクスの古典派批判就中スミス批判に關する検討を事実上前提しており、内容的にはその継続をなすのであるが、今後進める予定の研究との関係で、それは区別したものとして行なっている。

(5) いわゆる前期マルクスでのリカードの位置づけについては、すでに吉沢芳樹「マルクスにおけるリカード理論の発見と批判」(『社会科学年報』第四号、一九七〇年、専修大学社会科学研究所、所収)がある。

二 リカード批判の要点

『グレントリッセ』において、資本・賃労働関係の第二の側面を、究極的には必要労働と剰余労働との関係に帰着する原理的抽象として——したがって第一の側面との関係では資本の生産過程を剰余価値の生産過程として——

基礎づけえたことは、マルクスの対象把握を大きく進めたことに間違いない。そしてまた、そのような成果をもつてすれば、マルクスにとっては、基本的にはリカードの批判的再検討のための理論的基準をひとまず確保しうることになっていたと言いえよう。この点は、いうまでもなく、資本の生産物である諸商品の自然價格的均衡(生産價格)をいわば絶対的前提として、労働(過去の労働)を含めて、生産物の価値分配論を展開したリカードの体系的難点の克服として不可欠の条件となつたのである。こうしたリカードの価値と價格の同一視による理論的性格を、剰余価値と利潤との問題として批判の対象とすることは——確かに、この点がもっともリカードに即したかたちであるというが——、同時に、その同一視のゆえんとまたそのような同一視を必然化する資本家的商品經濟の特質を明らかにすべきこととならざるをえないのである。したがって、具体的にはこのような問題は、『グルントリッセ』以後のすなわち一八六一―六三年の『草稿』における解明として進められねばならなかったわけである。

以上のようなコンテクストのうえで、マルクス自身彼のリカード理論の詳細な検討にあたつて、リカードの『經濟學および課税の原理』(以下、『原理』と略称)の体系構成への考察を与えつつ、その構成に内在する批判上の要点に對しこのように指摘したのであった。すなわち、「そこでわれわれは、リカードを批判するにあたつては、彼自身が區別していないものを區別しなければならぬ。〔第一に〕彼の剰余価値の理論で、これはもちろん彼には存在する。といつても、彼は剰余価値をその特殊な諸形態である利潤や地代や利子と區別して確定してはいないが。第二に、彼の利潤の理論……」⁽¹⁾で、というようにである。そこで、問題は、まず、リカードが剰余価値を利潤と混同したことの理論的性格について明らかにすることなのである。そのさい、当然のことながら、そうした性格は、學說史的には、リカードによるスミスの批判的克服にかかわつて生じたはずの事柄として問われてこなければならぬはずであつた。というのは、マルクスにおいては、スミス『諸國民の富』第一篇第五章と第六章との間の

「矛盾」——ここに生ずべき理論的「裂目」としてスミスに感知された「矛盾」——について、その重要性を看過したリカードの理論的処理においていかなる問題を生じさせたのが明確にされなければならないはずだからである。

事実、マルクスは、再度スミスをリカードに対比して右のような点に関連させ検討しながら、今度はリカードについて考察を与えているのである。すなわち、リカードはスミスに対し、投下労働量による商品の価値規定と賃銀によるそれとの同一視を批判し、前者の規定を一貫させる論理を確立したのであるが、この点に関して、マルクスはひとまずリカードの正当さを評価しつつ、彼「リカード」が「A・スミスは、この二つの表現が同義であったかぎりでは、それを使用してさしつかえないが、しかしそのことは、それが同義であることをやめた場合に、正しい表現ではなくまちがった表現を使用するための理由にはならない、と」批判しているものとしている。このマルクスの「二つの表現が同義であったかぎりでは」という注釈は、おそらく、彼が着目しているリカードのスミス批判の叙述部分に関するものとしては妥当だとするわけにはいかないであろう。とはいえむしろ、そうするところにマルクスの読みこみがあると解せられるのである。事実、彼はそうした批判に続いて、このように述べているのである。すなわち、「しかし、リカードは、これによって、A・スミスの矛盾の内的な理由になっている問題をけつして解決したわけではない。労働の価値と労働の量とは、対象化された労働が問題である！ かぎりでは、やはり『同義の表現』である。対象化された労働と生きている労働が交換されるようになれば、それらは同義の表現であることをやめる」と。このような文脈から明らかなように、マルクスは、リカードの労働価値論がA・スミスのそれに——つまりいわゆる二面的価値規定として成立しているそれに——含まれている——とマルクス自身が解しているわけであるが——「矛盾」なるものの「解決」をなしうる性格にないとしているのであり、やはり彼はこ

でも依然としてスミスの価値規定とそこから成立している『諸国民の富』第一篇第五章と第六章との「裂目」に重きを置きつつリカードに向かっているのである。

いま、ここで改めてマルクスのスミス評価の一面について検討を加える必要はないのであるが、しかし、そこから生じてきたこうしたリカード批判においてマルクスが再度直面した事柄を無視するわけにはいかない。そのさい、彼がここでも固執することになっている「対象化された労働」の観点から生じている「同義の表現」としての「労働の価値」（賃銀）と「労働の量」との関係が問題とならざるをえない。彼がリカードの労働価値論批判に対して右のような観点をだすことになっているのは、いわば、リカードの労働価値論は一見したところでは正当のように思われるが、そこから、資本・賃労働関係を——したがって剰余価値論を——導出しようするような内容を見出すことはできないので、不十分なのだ、としているわけであろう。自明なことであるが、マルクスその人が賃銀によって商品の価値が規定されるとしているはずはない。しかし、賃銀という形態を抜きにして剰余価値を導びき出すことはできないのではないか、というのが彼の視点となっているのである。

マルクスがこの賃銀形態を根拠としてリカード批判を行なっているのは、おそらく、結果的な見方をすれば、彼の対象把握の方法に由来するものとしてよいのであろう。そのために、彼は例えば、「労働という商品と他の商品とは、なにによって区別されるのか？ 一方は生きて、いる労働であり、他方は対象化された労働である。したがって、それらは二つの違った形態の労働にすぎない。相違はただ形態的なものにすぎないのだから、なぜ一方にあてはまる法則が他方にあてはまらないのか？ リカードは、それに答えていないし、この問題を提起さえもしていない」と言うことができるようになってくる。資本・賃労働関係を二つの側面、過程に分離するという彼の対象把握の方法に由来する一つの特徴がそうした「形態」から生ずる差異と共通性との論点に結果しているのである。だが、

この点は、彼のスミス批判に対して必ずしも十分ではなかったように、やはりリカードに対しても十分な批判となりえているか、疑問とされうるのである。もちろん、そのさいに、マルクス自身が十分にリカードの理論の性格を把握していたのかも同時に疑問とされうるのであって、まずこの点が問題とされねばならないであろう。

マルクスが、右のようにリカードを問題にしているのは、当然のことながら、リカードにスミスのごとき「対象化された労働」相互の交換と、「対象化された労働」と「生きてゐる労働」との交換との区別の視点がなかった、というこでとある。あるいは、マルクスの言い方に従えば、リカードは、後者の交換もスミスの支配労働価値論批判のかたちで、『ある商品に投下された労働の量とこの商品が購買するべき労働の量』とは等しいものではない。

この事実を確認することでは彼は満足する⁽⁶⁾という程度のことではしかなかったということなのである。しかし、こうしたマルクスの批評が、彼の別の箇所での指摘、すなわち「……彼〔リカード〕は、商品と資本との商品対商品の交換と資本対商品の交換との独自の相違を——商品交換の法則に従って——理解することができないのである⁽⁶⁾」というようなことと結びついているのであるならば、きわめてリカードに対し外在的な、超越的な指摘であると言わざるをえない。マルクスが述べているように、リカードはスミスの「裂け目」を認めてはいない。したがって、マルクスが指摘するような「交換」の区別を、そうした理論的処理によって説明しなければならないとはしなかった。とはいえ、それではまったくそのような問題と無関係でありえたかといえ、そうではなかった。彼にとつては、「資本対商品」の交換ということの具体的な現われ方は、周知の『原理』第一章第四、五節における労働価値法則の修正論ということに結果せざるをえないものであった。マルクスには、明らかにそうしたリカードの論点は剰余価値の利潤への転形の問題として解されていたであらう。しかし、リカードに対して、その点をただそうした分野に関係することだとしてしまうわけにはいかないはずなのである。確かに、リカードは商品対商品の交換比率

を——それゆえ「対象化された労働」相互の交換を——労働価値論で明らかにしようとしたわけであるが、まさにそうであったからこそ、逆に「対象化された労働」⇨資本と「生きている労働」⇨賃労働との交換から生じた結果を通じて、したがって賃銀形態と並ぶ利潤の形態を通じて修正論に直面せざるをえなかったのである。

そこで、右のようなことがリカードの理論に、その労働価値論の性格から生じてくるということであるならば、マルクスの指摘はむしろ逆のことではないかとさえ考えられるのである。つまり、彼のいう二つの交換にかかわる「矛盾の内的理由」の理論的な確認者はむしろリカードにあるのであって、スミスにおいてはその点は「内的な理由」として「提起」されるようになっていくわけではない、というようにである。すなわち、スミスに関してみれば、周知のように、彼は『諸国民の富』第一篇第六章以降の自然価格論およびそれに続く分配論について、通常指摘されているように、支配労働価値論を媒介させつつ、いわゆる生産費説的理論を与えている。そこではその自然価格は直接的に投下労働価値論に左右されるような関係を有してはいないのであって、結果的には最早価値論の次元とは区別された次元として論じられているようになっていく。したがって、そこには、なにか価格に対して価値量的にどう辻褃が合うかどうかというように余地はない、というようになっていく。やや乱暴な言い方になるが、第一篇第五章での価値論との関係でみれば、*additional quantity*としての剰余価値が与えられてくるだけであって、それ以上のことにはなりえないように説かれている。「分け合う」関係としての三階級関係とされたことは、スミスにとって「資本主義的な生産は結局そうしたものである」ということでしかないような理解であったはずである。

リカードがスミスを越えて明らかにしたことの一つに、利潤の形態であったにしろ、労働価値論に基づいて剰余価値の把握に進みえたことがあげられるのであり、この点について一般的に疑問の余地はないように思われる。そ

うであれば、当然のことながら、そうしたリカードにおける発展は、彼がスミスに比較してそれだけ、対象の階級的性格をより内在的に把握していることを示すことになるわけであろう。そうすると、またマルクスのリカード批判が一種の筋違いとならざるをえないことになるわけだが、利潤と剰余価値との等置という問題——この点にかかわる「対象化された労働」と「生きている労働」との、したがって「資本」と「貨銀」との交換の問題は別として——と関連することになるスミスの「裂け目」は、逆に形態上では資本が利潤を生むものということに結果しうるものとなっているにすぎないのである。それゆえ、批判されるべきことは、マルクス本人がではなく、リカードがなげスミスに対し「矛盾」「裂け目」を見出してしまったか、ということになるはずなのである。ややこの時期のマルクスについて過酷なことになるのかと思われるが、彼自身がむしろ、「資本」について概念的に「対象化された労働」という古典派的把握と結びついている側面があるために、いわばリカードに代わって見出してしまったことから生じた問題でもある。つまり、確かにリカードは直接的に明示的な「裂け目」の確認をなしえたわけではなかった。だが、理論そのものとしては、それに直面せざるをえなかったわけであり、それが例えば『原理』第一章第五節のようなこととして生じてくることになったのである。他方、マルクスは、すでにそうしたリカードの分裂を彼の対象把握の方法のうちに、問題を抱えながらも、確認することができたわけであり、したがって彼の視点はむしろ彼自身のコンテクストのうちにリカード理論をどう分解するかということであつたと思われる。

右のようなことであるならば、マルクスがリカードについてスミスへの無理解を批判するとき、絶えず彼自身に対し二重化した論点を交互に恰も一つであるかのように提出するようなこととなった。つまり、彼が実質的に見ているものは、リカードの価値論と剰余価値論との関係——すなわち商品対商品の交換関係と「対象化された労働」と「生きている労働」との交換関係——であるにもかかわらず、そのこと自身が彼にとって具体的に問題とされる

のはスミスにおいてである。というようになされているわけである。そして、その場合に、両者に対して恰も問題が一つであるかのようにさせているものが、「対象化された労働」というように把握されているマルクスの古典派批判のための資本概念であろう。マルクスがこうした資本概念を用いなくてはならなかったのは、リカードに見出すべき問題をスミスに見出し、この後者の理論的組み立てを通じてリカードの解明へと向かっているためである。言い換えれば、スミスの労働価値論に固執しつつリカードの問題を明らかにしようとしているからである。リカードがスミスの投下労働価値論のうえに——支配労働価値論の排除をもって——直接資本と労働との関係を成立させたことで、確かに「資本の歴史的な存在理由は説明されない」とすることも可能になるであろう。だが、そのスミスの投下労働価値論こそ一方でリカードを可能にしているのであり、また他方マルクス自身に、スミスを越える資本の歴史的 성격の規定を困難にしているのである。あるいは、ことばを変えるならば、その「歴史的」なることを彼のここでの水準に照らして剰余価値把握に求めるとするなら、彼をしてリカードに依存せしめているものである。そこで次に、このようなマルクスのスミスへの依存とそこから生じたリカード批判の一種の筋違いが、よりリカードに密着したときにどのような結果が生じているのかを見なければならぬだろう。

- (1) MEGA, 2. Abteilung, Band 3, Teil 3, S. 820. 大月書店版『マルクス 資本論草稿集』⑥、「経済学批判（一八六一一八六三年草稿）第三分冊」二四〇ページ（以下、MEGA, Bd. 3-3, 『草稿集』⑥、のように略記）。Karl Marx-Friedrich Engels Werke, Band 26, Zweiter Teil, S. 166. 大月書店版『マルクス・エンゲルス全集』第二六卷第二分冊、二一六ページ（以下、 Werke, Bd. 26-2, 『全集』第二分冊、のように略記）。なお、傍点は、MEGA 版でのイタリック体の強調による。また、・の強調は執筆者によるもの。

- (2) 以下、MEGA, Bd. 3-3, S. 1022. Werke, Bd. 26-2 S. 399. 『草稿集』⑥、五六三—六四ページ。『全集』第二分冊、五四四ページ。

- (3) 拙稿『経済学批判』体系の一考察」(三) (『経済志林』第四一巻第一号、第四三巻第四号、一九七四、七五年、所収)、
においてすでに若干の検討を行なっておいた。参照されたい。
- (4) MEGA, Bd. 3-3, S. 1023, Werke, Bd. 26-2, S. 400. 『草稿集』⑥、五六五ページ。『全集』第二分冊、五三五ページ。
- (5) MEGA, Bd. 3-3, S. 1023, 1023. 1023, Werke, Bd. 26-2, S. 400. 『草稿集』⑥、五六五ページ。『全集』第二分冊、
五三三ページ。
- (6) MEGA, Bd. 3-3, S. 1028, Werke, Bd. 26-2, S. 406. 『草稿集』⑥、五七三ページ。『全集』第二分冊、五四三ページ。
- (7) この点については、この時期にマルクスがリカード批判のうちにリカードの「難点」の確認と、それに対応する彼の独
自な体系構成の枠組を明らかにしていたことについて、すでに念頭に置いて言及しているのであるが、その「難点」確
定にかかわる概括的な判断については「四 小括」でふれている。
- (8) MEGA, Bd. 3-3, S. 1029, Werke, Bd. 26-2, S. 408. 『草稿集』⑥、五七五ページ。『全集』第二分冊、五四六ページ。

三 リカード「剰余価値」論の批判

スミスに対して、リカードが学説史的にどのように位置づけられたのか。マルクスのリカード批判の視点を問題
にすると、必ずしもその点は明確ではないように思われる。しかし、いちおう彼の議論に即してみれば、やはり、
通常どおりリカードの理論の体系的に一貫性にスミスを越える位置づけを与えているはずである。しかも、その体系
性の要諦は、彼の方法的視点からすれば、価値論から剰余価値論への展開に関係するはずであり、したがってす
でにみたようなスミスへの傾斜によって行なわれたリカード批判から進んで、その点がどのように処理されているか
が重要なこととなる。ところが、この場合においてもマルクスの目はまずスミスに注がれている。「リカードは、日
々の必需品に含まれている労働時間はこの必需品の価値を再生産するために労働者が労働しなければならない日々
の労働時間に等しい、ということを当然前提している。しかし、彼はこれによって一つの困難をもちこみ、この関

係の明確な理解を消し去っている。というのは、彼は、労働者の労働日の一部分を直接に労働者自身の労働能力の価値の再生産にあてるものとして説かないからである。ここから二重の混乱が生ずる。剰余価値の源泉は明らかでなくなりこうして資本の歴史的な存在理由は説明されないことになる。これに反して、スミスはすでに正しい定式を述べていたのである。価値を労働に還元することが非常に重要であったとすれば、剰余価値を剰余労働に還元することも、しかも明白なことばをもって還元することも、同様に重要なことだったのである。⁽¹⁾ この文章の流れからみれば、剰余価値を「明白なことば」をもって剰余労働に還元したのは、リカードでなくスミスである、というようにみえる。おそらく、すでにみたような価値論——「交換」における性質の相違としての——をめぐるスミス、リカードの両者の比較の議論の経緯からすれば、マルクスは右のように言わざるをえなかったのかもしれない。しかし、この点に関するかぎり、やはり彼のリカードへのこのような視点はきわめて強引なものではなからうか。

マルクスの先述のような方法的視角を前提してさえも、リカードをスミスとの対比でそのように決めつけることは困難なはずだと思われる。確かに、スミスは剰余価値を剰余労働に還元していると言いうるであろう。しかし、「明白な」というような強調をもって、しかも、リカードとの比較においてそのように論定することは、いわば彼自身の学説史的視点ともそぐわないことになる。彼が、スミスとリカードとの対象把握の功罪ともいべき対比を行なったさいに、そのかぎりでスミスの視点ないし理論的特質を積極的に評価したのは、いわば価値論から剰余価値論へ移るさいに生ずるであろう理論的困難をスミスが感知し、それを卒直に示しているというようなことであつた。しかも、このことはマルクスに即してみても、スミスがそうでありえたのは、スミスに独自の価値論の把握が成立しえたために言いうることなのであり、したがって彼のスミスへの視点も中心的にはそこに置かれていたので

あって、それゆえにこそ評価しえたことであらう。そうであるから、今度はスミスでは階級関係という枠のなかで処理されるべき事柄になると、そのための理論的展開がきわめて不十分なものとならざるをえなくなる——とマルクスには了解されている——わけである。

やや皮肉めいていうと、価値論においても剰余価値論においても、マルクスがスミスとリカードとを対比して両者に端的な評言を与えようとすると、往々にしてスミスに好意的になつていくようにみえる。しかし、スミスの経済学的性格に多分に楽しみな面があるということと、理論的進展の程度の評価とは当然のことながら別のことになる。もちろん、マルクス自身も実際上はそうしているはずであつた。そうでなければ、彼自身のリカードの検討に積極的な意味さえも失なわれてしまうであらう。この場合も、彼のスミスへの中心的な視点が直ちにスミスの剰余価値把握の文字通りの評価ということにはならないであらう。スミスに対するリカードの作業の進展の最も重要な意義は、むしろその剰余価値論にかかわる内容のこととならう。スミスが最も積極的なかたちで労働価値論を与えたその仕方は、階級関係をいわずしたうえで社会の物質代謝過程に位置する商品経済的労働を取り出すというものであつた。先述のようなマルクスのスミス評価の力点も、結局このところに置かれていた。したがって、このスミスの労働価値論の性格からして、それ自身で明確な剰余労働・剰余価値の剔出は困難なこととなつていく。周知のようにスミスが『諸国民の富』第一篇第六章で言及した剰余労働・剰余価値は、すでに理論的には自然価格論の領域を扱うところで与えられているのであって、その意味では厳密に論証されているような性格となつていない。もちろん、スミスにとってそれが可能であつたのは、第一篇第五章までに展開された彼の独自の対象把握があつたからであらう。しかし、それだからこそ、それはむしろインプリットにしか理解しえないような性格にあつたと言いうるのである。

他方、リカードに関してみれば、明らかにすでに彼自身の問題意識からして、スミスを超えるべき要点としてスミスの労働価値論と剰余価値把握との「ずれ」の克服に向けられていたはずである。それは、これもまたことあらためて詳論するまでもなく、彼が対象を明確に三階級社会として設定し、かつそれと必然的に関係する方法として、スミスの支配労働価値論を排除したことで端的に示されている。こうしたリカードの原理的仕組は、すでに最初から、古典派的手法であるにしても、階級関係を通じてのみ把握しうる剰余価値を導出するためのものであったと言えよう。マルクスでも、その功罪はともかくとして、彼自身の経済学の体系化のために見出した方法的視角からして、階級関係に根ざす商品経済の内実において資本の価値増殖の根拠を取り出すことに重要な意味があった。それゆえリカードの経済学に対し、他の種々の論点についてはともかくとして、基本的には資本と労働との関係から社会的剰余（価値）の根拠の把握に向かっている彼の研究を、先述のようなかたちでひとまず一蹴してみせるというのも、あまり納得的なことにはならないだろう。もちろん、マルクスがリカードに対してまったく剰余価値に関する理論的解明がないとしているわけではない。むしろ、この点に関して事実上はリカードに多くの注意を払っているとしてよいであろう。それにもかかわらず、前述のような指摘をなしたのは、多分にスミスの価値論への傾斜からの反作用としてであると考えざるをえない。

さらにまた、そのスミス価値論との関係からしても、むしろ、それによってリカードに独自なかたちで把握された「剰余価値」に一種の必然的な関連がみられるべきこととなるはずである。確かに、リカードの労働価値論は、『原理』の理論のなかで、スミスのような明瞭な論理によって、説かれているように思われない。彼が「絶対価値」の考察を積極的に進めていないことが、なによりもその点を示すことになっている。とはいえ、究極的には、彼自身が明言しているように、スミスの「労働＝本源的購買貨幣」とする労働価値論に依存しているとしてよいで

あろう。あるいは、そうすることによってはじめて資本の利潤の源泉を確定しようということできえあったと言えよう。それは今更いうまでもなく、彼の『原理』の体系構成において、つまり「第一章 価値について」のなかで剰余（価値）を含む資本の生産物としての商品の価値¹¹価格的性格を追求しなければならなかったことにおいて、明示されていることである。さらにまた、こうしたスミスとの継承関係によってこそ、彼の商品の価値の形成要素としての労働と「過去の対象化された労働」たる資本との、不可分かつ並存的な関係が成立しえていとも言いうる。²⁾その結果として、確かにマルクスの指摘するような、「資本の歴史的な存在理由」に関する理論的な外観は、リカードにおいて成立しうるものではなくなった。³⁾だが、まさにそうであることこそが、逆に、スミスにおいて実質的には自然価格論として資本（ストック）に対する剰余（価値）¹²利潤を与ええたにすぎないものを、彼の労働価値論に直接結びつけ、価値¹³剰余価値の同一次元での把握という意図を明示することになっているのである。

したがって、剰余価値把握ということに限定するにしても、古典派的——つまりはスミスのいうことになろう——抽象方法に基づくならば、本質的にはリカードのごときかたちにならざるをえないことになるのである。そもそも、労働それ自身を価値形成的性格として絶対化するならば、資本そのものについてさえ、なにか商品経済的に特種な、人間の経済生活過程に対する独得な性格として把握することは困難でかつ不可能なことであらう。それはせいぜいのところ、「過去の対象化された労働」とかあるいは「資材(stock)の蓄積」とかというように、人間の物質代謝過程でそうした労働と並びかつその所産であるものという程度のことになるだけである。そうした意味では、リカードでの「資本の歴史的な存在理由」の欠如は、スミスと無縁のことではありえない。つまり、スミスにあっても、そうした「存在理由」はすでにきわめて曖昧なものとされているのであって、彼にそうした視点がある程度みられるとしても、それは結局のところ、重商主義の歴史観に対するアンチテーゼとしての意味を帯びている

程度のことであり、しかも、そのことのゆえに、きわめて実際の歴史に対してネガティヴに描かれざるをえないこととなっているものである。それゆえ、こうしたスミスとのコンテクストでみれば、リカードは、いつそうはつきりとスミスのなかに存在するかのように見える「歴史」に対して古典派としての決着をつけているとも言いえる。

右のような事情だとすると、マルクスがリカードの場合に見出されるものは、「ただ私が相対的剰余価値と呼んだものについての説明だけである。彼は、（スミスやその先行者の場合にも見られるように）、労働日の大きさは与えられて、ということから出発する⁽⁴⁾」としていることはきわめて正当で、かつ示唆に富んでいると言いうる。彼の議論の筋道からすると、スミスにおいて「剰余価値、すなわち、……剰余労働を、一般的範疇としてつか⁽⁵⁾」まれたということがすでに基本線に置かれ、そのうえで、右のような理解を示すことになっていよう。マルクスのスミス剰余価値論評価自体に対しては、すでに言及したように、スミスに傾斜しすぎるものであるように思われる。しかし、その点を別にすると、むしろ、彼の指摘そのものがリカードのスミスとの関係を如実に示すことにさえなっている。スミスにおいて剰余労働⁽⁶⁾剰余価値の「一般的範疇」が可能であったのは、きわめて独得なかたちではあったが、投下労働価値論を商品経済的関係の統一的基準の根底に据えたからであった。つまり、そのものとしての価値形成的労働を設定し、この同じ労働が、ストックの所持者と相対したところで、剰余価値の形成たる追加労働すなわち剰余労働を行なうものであるかのように説きえたのであった⁽⁶⁾。マルクスのスミス評価のゆえんは、このスミスのストック（資本）に対する剰余価値の把握を「一般的範疇」として強調するところにあるのであろう。そうであるならば、当然のことながら、リカードにおいて成立する剰余価値把握は、スミスの労働価値論に立脚するかぎり、彼の指摘どおりに「相対的剰余価値」であること以外にはありえなかったと言えよう。スミスの価値形成的労働

働は、そこに資本との関係を重ねたとするならば、すでにそれ自身が剰余価値形成労働であるはなく、しかもその価値形成的であり増殖的でもある労働の内的関係はそうした労働そのものによって区別することも不可能となってしまう。可能な区別は、まさにリカード自身が行なっているように、労働者の取得しうる賃銀との関係で資本に對する増殖分たる利潤・剰余価値を相対的に規定するということによるしかなかったであろう。

このように、リカードの剰余価値把握の私たちは、結論としてはマルクスの指摘どおりとしてよいのであるが、そのゆえんということについては、これもまたスミスとの関係では彼のように処理してしまうわけにいけないのである。もちろん、この場合に、マルクスの視点としてはスミスにおける「資本の歴史的存在理由」に重点が置かれていることから生ずる議論であった。したがって、その点にかかわる彼自身の資本・剰余価値論に対する理解の性格が問題となってしまうのである。あるいは、逆にこれまでの彼のスミールカードとの関連で提出している視点からすると、剰余価値の「一般的範疇」なるものの彼の把握がいかなさされているかが問題とされることになる。そしてまたこの点は、同時に彼の資本の概念的把握と無縁ではないのであり、それはスミスにおける資本の「歴史的」存在の理由づけで十分たりうることでないことから明らかであろう。もちろん、ここに生じているマルクスの問題は、すでに彼自身の経済学の体系化作業の面からして、かなり大きくその理論的性格に影響を及ぼす関係にある。あるいは、彼の体系化作業の方法的視角という点からすれば、資本・賃労働関係を二側面に分離し、そこから、価値論、剰余価値論を理論化している論理の性格に反転しうる関係となることである。

ここでの場合、例えば、すでに言及したこととの関係で、「彼〔リカード〕」は、剰余価値の源泉も絶対的剰余価値も探求せず、したがって労働日を一定の大きさとみなしているからである。したがって、右の場合については、剰余価値と賃銀（彼はまちがって利潤と賃銀と言っている）が——交換価値からみて——ただ互いに反比例して増

減しうるだけだという彼の法則は、まちがいである⁽⁷⁾」とすること自身にマルクスの問題が結びついてくるのである。リカードのスキズの労働価値論への依存関係という点を度外視するにしても、また、リカードが實際上絶対的剰余価値の理論的把握を明示しなかったにしても、したがってその意味での資本の「歴史」的性格を与えていないしろ、彼の対象把握が、すでに社会的に剰余を産出しうる「労働日」を可能にしていることを、軽視しうるものではないであろう。もちろん、すでに明らかのように、マルクスはリカードに対して事実上その点をみているのであって、そうでなければ、おそらく次のような彼の議論も生じてはこないであろう。すなわち、賃銀や剰余価値が存在するというこのためには、「総労働日のうちで賃銀の再生産に必要な労働を越えるなんらかの超過分、すなわち、なんらかの大きさの剰余労働が存在するのに足りるほどに、社会的労働の生産性が発展していなければなら⁽⁸⁾ない」のである。まさに、リカードが『原理』で想定しているのはこのことであって、そうでなければ、「労働と労働能力との混同を別にすれば、リカードは、平均賃銀すなわち労働の価値を正しく規定している⁽⁹⁾」という関連も指摘しえない。したがって、リカードでは、こうした「平均賃銀」を形成しうる労働たりえること自体がすでに同時に剰余を社会的に形成しうるということなのであり、それゆえに、彼が古典派の枠組のなかでにしる、資本と労働との関係としてその点を表現することになれば、すでに資本に対する剰余を前提としつつ——そのために剰余価値＝平均利潤として——それに対応する労働賃銀を社会的平均「賃銀」とすることが可能となったはずである。

そうであるならば、リカードに対してこのように見ることも可能なことになろう。すなわち、資本に対する剰余（平均利潤）の変動と無媒介に把握された剰余価値としては、彼の理論では相対的剰余価値としてのみ表現されているのであるが、その価値増殖の実体的根拠とされた労働それ自身からすれば、そうした剰余価値を絶対的に可能にする性格を担うものとされていたのではないか、と。ただ、リカードにとってそれが論証上の問題とされなかつ

たのは、おそらく彼の「絶対価値」と同様に、「絶対」であるがために積極的意味を特ちえなかったのではないであらうか。はからずも、「……明らかなことは、剰余労働が存在しうるためには、労働の生産性の一定の発展が前提されなければならないにしても、こうした剰余労働の単なる可能性（つまり労働の生産性のこのような必要最低限の存在）だけでは、まだ剰余労働の現実性はつくり出されない、ということである」⁽¹⁰⁾とマルクスは言っている。確かに、この点が重要なのであるが、彼自身は、ここからその「現実性」に対して、資本による「剰余労働」への

「強制」を、「標準労働日のための全闘争」と並べて説くことになってしまふ。こうしたいわば理論からの逸脱は、前述のようなスミスの剰余価値把握の評価に傾斜しつつ併わせて彼自身の独自の対象への姿勢とあいまって生じたものであらう。したがって、このこと自身は、マルクスの対象把握のための理論に対して問題となりうるとしても、リカードについて、あるいはその姿勢そのものとしてはスミスについても、直接理論的解明に結びつくものではない。それゆえ、むしろ事柄は、リカードに成立した剰余労働がそうした「現実性」をまったく欠くものなのか、あるいはなんらかの「現実性」としての位置を有するものとはいえないのか、を考慮すべきこととなるのではないだろうか。

スミスに対してリカードが積極的に明らかにしていることは、マルクスが指摘しているとうりに「まちがい」ではあるにしろ、「剰余価値と賃銀」との「互いに反比例して増減」する「法則」である。そして、これがリカードをして剰余価値を「相対的」たらしめているゆえんでもある。しかしそのさい、リカードにおいて重要なことは、剰余価値の規定について真の解決が与えられていないとはいえ、——それゆえ歴史的に独自の階級関係を通じて解明されているのではないにしても——まさに資本と労働との関係としてしか剰余価値は把握しうるものでないことを明らかにしている点であらう。したがって、マルクスの言う「強制」とは相違するとはいえ、資本が労働との関

係で必然的に確定しなければならない性格を取り出しているのである。その意味では、スミスがなしえなかったことを、すなわちその必然的なものとして労働価値論をもって理論化することを、リカードがなしていることが彼における「強制」とみられてよいはずであろう。

- (1) MEGA, Bd. 3-3, S. 1029. Werke, Bd. 26-2, S. 407~408. 『草稿集』⑥、五七五ページ。『全集』第二分冊、五四五—四六六ページ。

- (2) スミスが、『諸国民の富』第一篇第五章で、投下労働価値論と支配労働価値論とを併置し、両者によって彼の独自の価値論を説いたさい、すでに分業労働を明らかにしかつその分業労働に事実上はストックの蓄積を想定しながら——第二篇の「序論」で言及していることからして——、これを排除するような展開となっていることは、スミス自身についてみればむしろ彼の資本(ストック)概念の不明確さと無縁でなかったように思われる。もちろん、これは彼の価値論の性格に由来することであり、そのために必然的であったことで、その欠陥を云々しようとしているわけではない。

- (3) ただし、この点に関しては、リカードにまったく「歴史」的含意を見出すことができないという断定を留保しなければならないであろう。いわゆるリカードにおける「初期未開の社会状態」に関する検討を別にしても、なお彼の『原理』にみるべき「歴史」が考慮されうように思われる。この点については、改めて別稿において考察するつもりである。

- (4) MEGA, Bd. 3-3, S. 1038. Werke, Bd. 26-2, S. 415. 『草稿集』⑥、五八六ページ。『全集』第二分冊、五五五—五七〇ページ。

- (5) MEGA, Bd. 3-2, S. 375. Werke, Bd. 26-1, S. 53. 『草稿集』⑤、七二二ページ。『全集』第一分冊、六六六ページ。

- (6) なお、この点についてより詳細には、前出拙論『経済学批判体系』の「考察」(四)および、安田展敏「アダム・スミスの『剰余価値』論に関する「考察」」(『旭川大学紀要』第六号、一九七八年、所収)、「アダム・スミスの『剰余価値』論に関する「考察」」(平林編『経済学説史研究』(時潮社、一九八二年、所収)を参照されたい。

- (7) MEGA, Bd. 3-3, S. 1032. Werke, Bd. 26-2, S. 411. 『草稿集』⑥、五七九ページ。『全集』第二分冊、五四九—五五〇ページ。

- (8) MEGA, Bd. 3-3, S. 1030. Werke, Bd. 26-2, S. 408. 『草稿集』⑥、五七六ページ。『全集』第二分冊、五四六—四七

ページ。

(6) MEGA, Bd. 3-3, S. 1028. Werke, Bd. 26-2, S. 406. 『草稿集』⑨、五七三ページ。『全集』第二分冊、五四四ページ。

(10) MEGA, Bd. 3-3, S. 1030. Werke, Bd. 26-2, S. 409. 『草稿集』⑨、五七六ページ。『全集』第二分冊、五四七ページ。

四 小 括

マルクスがリカードの批判的検討に入ったさいに、学説史的關係としては、彼独自のスミス評価をかなり強固に維持しつつ進んでいる。もちろん、その評価は、彼が「経済学批判」の体系化に着手した一八五〇年代の終わりに確立しつつあった対象把握のための彼の独自の視点といわば表裏の關係ともいべき性格のものであっただろう。したがって、彼が行なっているリカードの批判的検討に対して、再三スミスとの關係が言及されスミスに傾斜する視点が表わされているのは、そうした彼の方法的視点によって生じてきたものだとも言いえよう。そうすると、彼のスミスやリカードに対する批判的検討の考察は、逆に彼のその方法的視点に対する考察をも必然的に含むことにならざるをえないのは自明なこととなるわけである。だが、そのさいに、すでに彼の方法的基準によっては十分にその批判対象の有する理論的性格を開示しえないことが生じてくるものとみななければならないわけであって、むしろそこから彼の方法的視角を相対化する意味も生じてこよう。そのさい、すでに言及したことからも明らかであるが、マルクスは、リカードの『原理』における理論的な一貫性を高く評価しながらも、その一貫性に対するスミスとの關係とりわけスミスの労働価値論との關係について、どちらかというと消極的に取り扱う傾向を示すことになっていた。彼がそうせざるをえなかったゆえんは、そもそもすでにある程度確立しつつあった彼の価値や剰余価値

の把握が、スミスのそれらに対する表示方法と類似している側面があったからには可なり。しかし、ひとたびリカードにおけるスミスの性格を洗い出すということになれば、それは、マルクス自身に対して——つまり彼のスミス評価に対して——再検討を迫ることとなりうるものであった。とりわけ、スミスの労働価値論に通ずる彼の価値論がリカードとの関係でかなり重要な検討要因となりえたであろう。

例えば、すでに言及したように、マルクスはリカードの「平均賃銀」の規定が限定つきながら正しいと批評していた。そのさい、彼は続いて次のような解説を加えている。「ところで、この定式は（労働と資本とを直接に対置させていることを別にすれば）正しいとしても、まだ十分なものではない。個々の労働者は自分の賃銀を補填するために、自分がそれによって生活するところの生産物を確かに直接に生産し、再生産するわけではないが——つまり、この過程の継続性を考えてみれば、そうなのであるが——（彼は、自分の消費にはまったくはいるない生産物を生産するかもしれないし、また、彼が必需品を生産する場合でさえも、彼は分業によって必需品のほんの一部分を、例えば穀物だけを生産し、それに一つの形態（例えば、パンという形態ではなく穀物という形態）を与えるだけである）、しかし、彼は自分の生活手段の価値をもつ商品を生産するのであり、言い換えれば彼は自分の生活手段の価値を生産するのである。したがって、このことは……日々の必需品に含まれている労働時間が彼の労働日の一部分をなしている、ということの意味するのである。」⁽¹⁾ こうしたマルクスのリカードへの批判的注解は、やはり労働の社会的分業編制を規定し、各労働者が商品生産を通じて労働力の再生産を果たすというかたちでの「労働日」の量的関係をもつて、その商品Ⅱ生活手段の価値と労働力の価値とを対応させるかぎり、きわめてスミスの世界と重なる内容となっている。しかも、これがまた、リカードにとって、まったく無縁の事柄ではなかったことこそが注意されなければならなかったのである。すなわち、「リカードは、日々の必需品に含まれている労働時間は、こ

の必需品の価値を再生産するために労働者が労働しなければならぬ日々の労働時間に等しい、ということの当然前提している⁽²⁾のである。すでに、「二」の部分でも言及したように、これこそがスミスに依存したリカードの要点であった。言い換えれば、リカードにとって、人間の日々の労働が——したがってその労働に基づく社会の経済的基礎過程が——商品の価値形成的労働と同義であるということは、すでにスミスによって発見されたことであり、しかもそれ以上に論証を必要としない当然の事柄でもあった。それゆえ、マルクスがここでリカードの「平均賃銀」を相手とし、みずからの解説を与えているときに、社会的な分業編成を想定し、商品生産やその価値について言及しつつ結局そうした視点や抽象像を明示しなかったリカードの難点に不満を表明する以外になかったのもいわば当然ではあった。だが、同時にそこでは、すでにスミス・リカードの流れに対してなすべき議論に彼が十分成功していないことになっている点を表明するものでもあったのである。

あるいは、マルクスの視野は、まったく別の視点の可能性についても、こうした議論の道筋では閉ざされていたとも思えるのである。リカードが「平均賃銀」を規定しているのは、同時に平均利潤を成立させうるからであったが、そしてこれが「労働と資本とを直接に対置させている」ことにほかならないであろうが、そのさいにリカードがスミスの理論に見出しえなかった事柄が生じていたのであって、むしろそのために彼自身が始終難問を抱えることになったのである。周知の労働価値法則の修正論がそれであって、彼の「平均賃銀」「平均利潤」の理解は、スミスがそれらを労働価値論とは区別して規定したかぎりで、いわば異次元の概念として設定しえ、それゆえ量的平仄の問題を生じさせえなかった意味を汲むこともできえなかったのである。スミスの場合、明確な認識上の問題として処理されていたかどうかについてにわかに断定し難いが、結果的には、「ストックの蓄積と土地の占有」との両者に先行するいわゆる「社会の初期未開状態」であろうと、「分業がなく、交換もめったに行なわれ」ないよ

うな「社会の未開状態」であろう、労働を「本源的購買貨幣」とする自然と人間との物質代謝過程に価値関係の源泉が置かれ、人間の側が三階級関係のもので、それが「自然価格」関係を——あるいは「自然価格」形態を——とることとは究極的に区別されてしまうものでもあった。おそらく、こうしたことは、スミスの「孤立的な個人としての『経済人』」と、三階級関係として現われているより具体的事象への「現実観察の側面」との「二重」⁽³⁾化するこの性格にかかわっているわけであり、後者の視点では「地代」をも自然価格の原因とみなすほどになりうる違いを含むものであった。

右のような事柄について、リカードがスミスのなかに見出すことは当然のことながらほとんど不可能であった。しかし、彼は否応なしにその問題に直面したのであって、スミスの価値形成的労働と同時に価値増殖的労働とすることによって価値と自然価格（生産価格）との異質性に実質的に到達していたのである。もちろん、そこに到達したとするとその問題を解決することとは、まったく別の事柄であった。マルクスは、このようなリカードの事情に対して、スミスの価値論と剰余価値論との関係を「歴史」的異質性の認識として評価し、リカードのそれについてこの異質性の解消として批判した。しかし、仮りにスミスの問題の本来の所在が価値と自然価格との関係にかかわることであったならば、そうしたマルクスの視点そのものが彼のリカード批判の道筋を不明確にすることにもなったわけであろう。いまここで、これらの諸論点について直接扱うわけではないが、マルクスがリカードの体系の欠陥を指摘しているさいに、すでに右のような点に及ぶ問題が含まれていたと思われるのである。つまり、彼の指摘は周知の「R（リカード）」の体系における第一の難点は、資本と労働との交換——それが『価値の法則』に一致して行なわれること——であった。第二の難点は、等量の諸資本がその有機的構成はどうであろうと、相等的い利潤を——または一般的利潤率を——もたらすということであった⁽⁴⁾とするものである。このような「難点」は、彼の

ことは通りに受け取るならば、それ自身価値と生産価格との関係なのであり、しかもその両者をリカードのごとく同一次元で処理することの欠陥を指示しているものであろう。しかしながら、その第一に言及されている「価値の法則」が彼によって労働価値論を内実とすることとして与えられていると解されるのであるから、学説史的な関係からして、リカードの難点としての取り扱いにしろ、リカードに伏在するスミスにあるいはスミスからリカードへの古典派の展開に対してまで及びうる真の難点となりえているかが問われる性格をも有するものとなっているのである。

それにしても、マルクスによるスミス、リカードに対する学説史批判の大枠から生じる問題を検討するさいに、けっして見落すことのできない別の論点が介在するのであって、それは、直接的な学説批判に生ずることというよりか、むしろ彼の経済学批判の体系化の側に生じている点との対応関係で考慮しなければならない性格をもっている。周知のように、マルクスの一八六一―一六三年の「草稿」では、『経済学批判（第一分冊）』に続く「第三章 資本一般」以下の考察が進められているのであるが、その「I 資本の生産過程」、「1 貨幣の資本への転化」のなかで、「労働過程」というのちの『資本論』のそれに対応する重要な研究を与えている。他方、この部分は、マルクスがすでに『グレントリッセ』、「資本に関する章」の最初部分で、「資本の生産過程は物質的生産過程一般と区別されなくなる」のであると解したことのさらに進んだ考察であるとも考えられる。もちろん、両者は社会の経済的基礎過程の把握・抽象のいわば視点としての共通性をもつとはいえ、内容的には非常に異なったものになっている。いまその相違に関する考察を検討するものではないが、しかし、こうした視点を確保しているマルクスと、一面では、この小論でとりわけ着目した彼の資本の「歴史」性の解釈およびそれに対応する古典派の考察、批判の論理とが直接的には必ずしも整合しえていないように思われるのである。その点に関しては、例えば、彼が「労働過程の、

ここで考察された形態は、規定された歴史的な特徴のすべてを剥ぎ取られた、そしてあらゆる種類の労働過程に——労働過程のあいだに人間どうしがどのような社会的関係に入ろうとも——適合する、その抽象的形態にすぎない⁽⁵⁾」としていることの意義が重要になっているように思われるのである。彼の「労働過程」論そのものにかかわる検討は別の考察を必要とするのであるが、こうした理解は、逆にその「労働過程」に基づいてある特定の「形態」をして「歴史」的なそれたらしめるものであり、そしてまた、それこそがスミス、リカードの対象把握に欠如したものであった。

(1) MEGA, Bd. 3-3, S. 1028~29. Werke, Bd. 26-2, S. 407. 『草稿集』⑥、五七四ページ。『全集』第二分冊、五四四—四五ページ。

(2) MEGA, Bd. 3-3, S. 1029. Werke, Bd. 26-2, S. 407. 『草稿集』⑥、五七五ページ。『全集』第二分冊、五四五ページ。

(3) 時永淑『経済学史』（改訂増補版、法政大学出版局、一九七一年）一九六および二二九ページ。

(4) MEGA, Bd. 3-4, S. 1357. Werke, Bd. 26-3, S. 177. 『草稿集』⑦、二六三ページ。『全集』第三分冊、一三二ページ。

(5) MEGA, Bd. 3-1, S. 56. 『草稿集』④、一〇〇ページ。